

長野市における 都市公園の景観構造と潜在的利用評価に関する研究

令和3年2月 山縣 梢

要旨

目的

都市公園には、人々の憩い場や避難の場としての機能に加えて、生物多様性の確保等、永続的な緑地としての重要な機能が備わっている。本研究では、長野市における都市公園を対象として、景観生態学の観点から、公園の空間的な景観構造を分析し、さらに、道路ネットワークと建物分布の観点から、とくに街区公園の潜在的な利用評価を行い、永続的な緑地としての有効性を検討した。

方法

まず、長野市内の全ての住区基幹公園を対象に、そのポリゴンデータを作成して、FRAGSTATSにより8つの代表的な指標を選択し、景観構造の分析を行った。次に、基盤地図情報（道路縁、建築物外周線）を用いて、道路中心性ネットワークと普通建物ポリゴンのデータを作成し、モデリングツール Rhinocerosにより街区公園の潜在的な利用を評価した。

結論

景観生態学の観点から、長野市における住区基幹公園を種類別に分析した結果、街区公園に分類される、合戦場公園および牛島輪中公園で面積・形状・距離の観点から特徴を得ることができた。これらの公園はそれぞれ市街地と農村地に立地しており、景観生態学的な面の違いから、市街地ではより形状が複雑な公園を設置し生物多様性の保全に配慮し、農地周辺ではコアとやる緑地としての公園を確保し、エコロジカルネットワークを構成する公園が望まれる。また、公園から道路距離500m以内に位置する住民による公園の潜在的利用を評価した結果、潜在的利用者が多い代表的な公園は、三輪東公園、北長野一号公園等であった。これらの公園周辺は交通網が発達している市街地であり、また公園に備わる設備を考慮するか否かによって大きな違いはなかったことから、公園の潜在的利用には、周辺施設と関連した、歩行者ネットワークの構築が重要であることが分かった

指導教員 藤居 良夫 准教授